

僧尼に勧められて懺悔礼仏し戒行を受持してからは徐々に富貴の身となった。しかし、心が緩み、戒を破ったために、封印していた財産が封はそのままに中身のみ消滅し、貧民に戻ってしまった。

周善通は隴西王の李博父の知り合いで、王が唐臨に語った。

【解説】隴西王李博父は「54唐・張法義」の話者でもある。太宗の従兄弟であるが、その語った話は二話とも庶民についての話である。

V 顕慶年間（656～661）

顕慶は、唐の高宗李治の治世における二つ目の元号で、六年続いた。

顕慶四年（659）、唐臨は則天武后の側近である李義府の恨みを買って、長孫無忌の謀反に連座して潮州刺史に左遷された。おそらくはそれから間もなく卒した。享年六十。

注

（1）前半部は三田明弘『『冥報記』クロニクル—南北朝・隋朝編—』（日本女子大学紀要人間社会学第24号 2014）を参照のこと。

（2）『冥報記』本文は諸本のうち最も所収話数の多い前田家本に基本的に拠るが、他本の方がより正確であると判断される部分は改めている。説話番号は『冥報記の研究 第一巻』（説話研究会編 勉誠出版 1999）に拠り、説話標題・年代は筆者の判断に基づき附したものである。

（3）之仲珪弟孝諧為大理主簿、為臨説。更問州人亦同云尔。（高山寺本）

（4）臨以貞観七年奉使江東、楊州針医飄陀為臨説此。（高山寺本）

（5）臨以貞観七年奉使江東、陽洲甄陀為説此云尔。宝見在也。（前田家本）

（6）本稿における唐代人物の略歴等の情報は、筆者も執筆者の一人である前掲『冥報記の研究 第一巻』に拠るところが大きい。

※本稿は科学研究費基盤研究（C）研究課題「鬼文化・冥界表象からの日中比較説話文学史の構築」【研究課題番号 26370437】の研究成果の一部です。

行質が病死し、六月には尚書都官令史の王璿が突然病死した。王璿は冥府で身に覚えのない記録改竄について責められ、理路整然と反論して無罪となったが、宗行質は手元に功德の札がなく、苦を受けていた。王璿は取り調べを行った冥吏に賄賂を要求され、与える約束をして現世に帰り、約束を忘れていたと病気になる、謝罪して賄賂を送ると治った。

唐臨がこの出来事を聞いた時、大理寺の刑部侍郎劉燕客と大理少卿辛茂将が王璿を招いて、聞き取りをした。

【解説】高山寺本や『法苑珠林』に拠り、王璿の聞き取りを行った刑部侍郎の名は前田家本の劉燕を劉燕客と改めた。劉燕客は『文苑英華』卷四六四の「詳定刑名制」（永徽二年閏九月十四日）に「刑部侍郎劉燕客」と見える。辛茂将は唐の高宗頃の官人。父は辛肇（?～659）。『元和姓纂』卷三に「（辛）肇茂将ヲ生ム。右丞侍中。」とあり、岑仲勉『元和姓纂四校記』は、『旧唐書』に茂将が顯慶三年に大理卿、侍中となり同四年十一月に没した記事がみえることなどを指摘している⁶⁾。

3 唐・釋僧徹 永徽五年

【概要】釈僧徹が癩病の人を憐れみ、精舎の傍らの土穴に住ませ、法華經の読誦を教えたところ、病が癒えたのみならず、人の病気を治す力も得た。

唐臨が腫瘍を患った時も、僧徹がこの人を遣わして禁咒を唱えさせると効果があつた。

後に房仁裕が秦州の刺史となり、僧徹の精舎を、自然と泉が出来る奇跡があつたので陥泉寺と名付けた。永徽二年（651）正月に徒衆に「将に死なむとす」と言い、繩床に端坐して動かなくなり、花が降るなどの奇瑞があつた。僧徹の遺体は凍りついたようになつたまま、今で三年に

なる。唯目の中より涙が落ちることがあるという。

僧徹の弟子の宝秦たちや州の人々が語っていることである。

【解説】僧徹は、姓は斬、河東万泉の人。七七で卒す。『続高僧伝』卷二十の伝には、唐臨は万泉にいた時に僧徹に帰依していた、と記す。本話における現在では、永徽二年のさらに三年後の永徽五年（654）となる。この年が『冥報記』成書年代の上限となる。

IV 年代不明

43 唐・趙士

【概要】長安の東の市の筆工、趙士が客を招いて宴を催した。早めに着いた客が厠に行くと、青い裳に白い衣の十三四の美少女が、首に縄をつけられ、唐臼の柱に繋がれていた。少女は泣きながら、自分はこの家の亡くなった娘で、生前、べにおしろいを買ったために父の金を盗んだこと、盗んだ金を使う前に死んだので金はいまも台所の壁に隠してあること、父母の金を盗んだ罪をいまや命で償うこととなったことなどを語ると、頭の白い青羊に変じた。客が驚いてこのことを家の主人に語ると、確かに二年前に娘が亡くなっており、台所の金も少女の言の通りであつた。主はこの羊を殺さずに寺に送り、以後一家は肉食を断つた。

盧文厲が唐臨に語った。

【解説】「56 唐・韋慶植」の類話である。話型がパターン化され、様々なバリエーションが生じていた可能性がある。

27 唐・周善通

【概要】長安の貧者、周善通は夫妻で京城の諸寺の雑用をしていたが、

56唐・韋慶植 貞觀中

【概要】貞觀年間、魏王府の長史であった韋慶植の娘が、死んでから二年後に、母親の夢に青い裾に白い衣の姿で現れた。親のものを勝手に使った罪で羊に転生し、身を以て償いすることになったと娘は語り、家にいる首の白い青羊を殺さないよう頼んだが、韋慶植は羊を殺してしまった。後でわけを知った韋慶植は、悲痛のあまり病気になる、二度と起きあがれなくなった。

都の士人は皆知っている出来事で、尚書の崔敦礼が詳しく唐臨に語り、閻尚書も同じ話をした。

【解説】崔敦礼は咸陽の人。永徽中に中書令となる（『旧唐書』八一・『新唐書』一〇〇）。閻尚書は高山寺本によれば閻立德。閻立德は唐万年の人。工部尚書。人物故実を描いて名手と云われた（『旧唐書』七七・『新唐書』一〇〇）。

50唐・李寿 貞觀中

【概要】兗州都督であった宗室の遂安公李寿は貞觀中に職を退き、都に帰っていた。獵を好み、常に数羽の鷹を飼い、犬を殺してその肉を食わせていた。李寿が病気になる、五匹の犬がやって来て李寿を責め、李寿が追福を約束すると四匹は許したが、一匹の白犬は許さなかった。しかし、にわか現れた人に「その人を殺しても益はない。おまえのために追福をさせるのが善い」と諭され、その犬も許した。李寿は病気で体の不自由な身となり、犬の為に追福を行ったが、とうとう病はあまり良くならなかった。

李寿の姉の夫である延安公竇惲が、唐臨に話した。

【解説】竇惲は高祖李淵に仕えた内史令竇威の子。「51唐・竇軌」の竇

軌は従兄弟になる。「51唐・竇軌」は話者が記されていないが、本話同様、竇惲が話者であった可能性がある。

Ⅲ永徽年間（650～655）

永徽は、唐の第三代皇帝である高宗李治の治世における最初の元号。六年続き、永徽六年（655）には則天武后が皇后になった。

唐臨にとっては五十代の前半から半ばの時期であり、朝廷の要職を歴任した時期でもある。『冥報記』の完成も、この時期と考えられる。

28唐・豆盧氏 永徽元年

【概要】陳公夫人豆盧氏は芮公豆盧寛の姉である。仏法を信じ、金剛般若経を誦誦し終えることを目標にしていたが、一紙ばかりをまだ読み残していた。暮れ方に頭痛に苦められ、死んでしまえば読み終えることが出来ないと思い、灯火を求めたところ、庭から不思議な火が部屋に入ってきてあたりを照らし、頭痛も治り、読み終えることが出来た。これより、毎日五遍、金剛般若経を誦した。後に芮公の死に立ち会った時、芮公は「吾が姉、誦経の福を以て当に寿百歳にて好処に生ずべし」と言った。夫人は八十歳で、今も健康である。

夫人が唐臨の嫂に語った話である。

【解説】豆盧寛は、豆盧通と隋の文帝の妹である昌樂長公主の子で、永徽元年（650）六月四日に六九才で薨じた。貞觀中に左衛大將軍、芮公に封ぜられた（『旧唐書』九〇・『新唐書』一一四）。

53唐・王璿 永徽二年

【概要】永徽二年（651）五月に仏法を侮っていた尚書刑部侍郎の宗

李仙僮の事件も記録がなく、本話の内容は疑問が多い。

52唐・傳奕 貞觀十四年

【概要】傳奕・傳仁均・薛頤が太史令であったとき、傳仁均は薛頤に金を貸したまま死に、返済金は傳奕に預けるように夢で薛頤に言った。同じ夜、少府監馮長命も傳奕が冥途で罪の報いを受けることを示唆する夢を見た。薛頤が返済金を傳奕に預けたところ、貞觀十四年(640)秋に傳奕は突然死亡した。

唐臨は薛頤・馮長命から直接に話を聞いた。

【解説】『法苑珠林』に拠り、傳仁均に金を借りた人物の名は前田家本の薩驥から薛頤と改めた。傳奕(五五五・六三九)は唐の相州の人。官は太史令に至る。排仏論者として知られ、『高識伝』十巻を著した(『旧唐書』七九・『新唐書』一〇七)。

54唐・張法義 貞觀十九年

【概要】華州の張法義は貞觀十年(636)に木を伐るために入山し、岩窟で座禅をしている僧と出会い、食べ物を与え、俗人は罪が多いことを教えられて懺悔をさせてもらった。張法義は貞觀十九年(645)に病死し、冥府の裁判で、罪の記録が検査され、多くの罪は朱筆で帳消しになっていたが貞觀十一年(637)に父親に悪態をついた事で罰されそうになった。すると、そこに岩窟の僧が現れ、七年延命されるようにしてくれた。こうして蘇生した張法義は岩窟の僧の弟子となった。

張法義は隴西王の李博父の近くに住んでおり、王が唐臨に詳しく語った。

【解説】隴西王李博父は唐の高祖の兄、李湛の子で、官は宗正卿・礼部尚書に至った(『旧唐書』六〇)。「27唐・周善通」の話者でもある。

26唐・李思一 貞觀二十年

【概要】貞觀二十年(646)に大廟丞李思一は冥府に連行され、身に覚えのない殺人について尋ねられ、事件の起きた日は涅槃經を聴講していたことを述べて、帰ることを許された。蘇生した李思一の話を聞いた清禪寺の僧玄通は李思一に懺悔警戒させ、その家の者たちに勧めて金剛般若波羅蜜五千遍を転読させた。李思一は再び冥府に召喚されたが、殺人のことは李思一と交代して人界に転生しようとした鬼の虚言と判明し、救いに来た僧らの口添えもあり、李思一は死を免れた。

唐臨がこの事を聞き及んだ後、大理卿李道裕が人を遣って玄通の話を記録した。

【解説】李道裕は右衛大將軍李大亮の甥。官は大理卿に至る(『旧唐書』六二・『新唐書』九九)。「19唐・李大安」の話者の一人でもある。本話の末尾の記事から、唐臨の説話収集に協力していたことが窺える。

17唐・盧文厲 貞觀中

【概要】監察御史盧文厲は雲陽の尉であった時、江南で医者や薬も役に立たない腹の病に罹り、観音を念じていると、観音菩薩が現れ、腹中の穢物を取り除き、病気を癒してくれた。

ともに御史であった時に盧文厲が自ら語った。

【解説】唐臨は貞觀中、侍御史を務めたことがあり、盧文厲とともに御史であったというのは、この時期と考えられる。盧文厲は他に「24隋・崔産武」「42唐・殷安仁」「43唐・趙士」の話者でもある。

河を渡った際に船が沈没し、他の人が皆死んだ中で、一人だけ水中を歩き、氷を穿って岸に上がることが出来た。体が火で炙ったようで寒そうな様子もなかったのは禪定に入っていたためだと識者は考えた。また、仁寿寺で食を求めて道懸に皮肉を言われた際、逆にその心の余裕のなさを指摘し、道懸を感嘆させた。貞観中に卒した。

法端をはじめ道俗皆が語った話である。

【解説】道英は普濟寺の僧で、貞観十年（636）九月、七七歳で卒している（『続高僧伝』二五、『華嚴経伝記』三）ので、標題にはその年を記した。道懸のことは「5唐・釋道懸」に見える。法端は「4唐・練行尼」の話者でもある。

22唐・元大宝 貞観十一年

【概要】貞観中に大理丞であった河南の元大宝は仲の良い同僚の張叡冊と、先に死んだ方が因果の有無をもう一人に教えることを約束していた。元大宝は貞観十一年（637）、帝の行幸に従って洛陽に行った際に病死し、翌日に張叡冊の夢に現れて冥報の確かに存在するを語り、福業を修めるよう勧めた。

唐臨はこの話を張叡冊自身から聞いた。

【解説】三代皇帝高宗の時代に唐臨は大理卿に昇進しており、大理丞などの大理寺の官吏に関する説話が、『冥報記』には少なくない。

30唐・遜廻璞 貞観十三年

【概要】殿中侍御医遜廻璞は貞観十三年（639）帝の九成宮への行幸に従って三善谷に宿泊した際、夜中に召喚され冥府に連れて行かれそうになった。人違いだったために解放され、自宅に帰り、自分の肉体に魂

がなかなか戻れないという経験をした。貞観十七年（643）、隣家の鄭国公魏徵が死んで、冥府の大陽都録大監となり、遜廻璞を記室に指名したために冥府に連れて行かれることになったが、出立前に僧を請じて行道させ、造像・写経もした功德により冥府から帰された。

遜廻璞自身が唐臨に語った。

【解説】前田家本は「殿中侍御史」とするが、本文中に齊王の元に行き病気の治療を行うという記述が見られるので、高山寺本の「殿中侍御医」が正しい。九成宮は、隋の文帝の仁寿宮を唐の太宗が改めて避暑宮とした。今の陝西省麟游県の西にあった。「45唐・馬嘉運」の説話を太宗の下問により岑文本が奏上した場でもある。魏徵は貞観の治を代表する名臣。太宗を諫めること二百余度にも及んだ（『旧唐書』七一・『唐書』九七）。

20a唐・董雄 貞観十四年

【概要】貞観十四年（640）、若い時から仏道を信じていた大理丞の董雄は李仙僮の事件に連座して獄に繋がれたが、獄中で法華経普門品を念誦すると鎖が解けるといふ奇跡が起こり、同室に収監されていた大理丞の李敬玄・司直の王忻も、誦経を行うようになった。特に李敬玄はもとは仏法を信じていなかったが、深く帰依するようになった。三人ともに後に無罪となった。

唐臨は病気の時に見舞いに来た李敬玄からこの話を聞いた。病気が治り、出勤すると御史台の官吏たちも同じ事を言っていた。のちに董雄からも聞いた。

【解説】李敬玄（615～682）は、後に中書令になる人物（『旧唐書』八一・『新唐書』一〇六）であるが、大理丞であったことは確認できない。

張亮自ら高昱に語り、幽州の人々も知っている話である。

【解説】張亮は貞観五年から七年にかけて幽州、夏州、鄜州の都督を歴任していることが『旧唐書』に見えるので、この出来事が起きたのは、貞観五年または六年のことと推測できる。『旧唐書』には張亮の仏教信仰のことは見えないが、熱心な崇仏家としての張亮に関する史料は少なくない。太宗の『貶蕭瑀手詔』（『全唐文』八）には「往前朕謂張亮云、卿既事佛、何不出家。」（かつて朕は張亮に「そなたは仏に仕えるのであれば、何故出家しない」といったことがある）とあり、また、貞観五年には張亮は阿育王寺の古塔の土台に覆いを造ることを奏上し、勅許を得ている（『法苑珠林』三八敬塔篇）。

45 唐・馬嘉運 貞観六年

【概要】学識のあることで土地の人に知られていた魏郡の馬嘉運は、貞観六年（632）正月、その才学を見込まれ東海公府の記室候補者として冥界に連れて行かれたが、冥府の司刑となっていた益州行台郎中霍璋の助力で免れ、代わりに呉人の陳子良が死んだ。また、馬嘉運は冥界に連れて行かれた時に、知人である張公謹の妻崔氏が、自分を道理もなく殺した夫を訴えているのを見たが、その張公謹も死んだ。後に馬嘉運は冥界の陳子良に訴えられたが、蜀の地で池の魚を買い取り放生をした功德で許された。

貞観中に九成宮で太宗がこの件について下問し、中書侍郎岑文本が詳しく記録して奏上した。嘉運は後に国子博士となり、在職中に卒した。

【解説】馬嘉運と張公瑾とともに魏州（現在の河北省魏県・大名県のあたり）の人。張公瑾は、凌煙閣二十四功臣にも選ばれている太宗の功臣の一人であったが、貞観六年四月に三九才で病死しており、死因を妻の

訴えとする本話が貞観六年正月の出来事と設定されているのはそのためである。高山寺本では貞観六年ではなく武徳六年となっているが、それは史実と符合しなくなる。

18 唐・戴胄 貞観八年

【概要】唐の貞観七年（633）に死亡した民部尚書の戴胄が、翌年の八月に友人の舒州別駕沈裕の夢に現れ「私は、生前、誤った上奏して殺させてしまった。また、私の供養の際に羊を殺して供えた人がいた。この二つの罪のために、私は苦を受けているが、漸く償いが終わろうとしている。」と言い、また沈裕が五品の官位を得ることを予言した。しかし、その年の冬の人事でその予言は実現せず、沈裕は夢は当てにならないと人に語った。ところが、翌貞観九年の春、沈裕は五品の位を得て、務州の治中となった。

吏部侍郎であった唐臨の兄が、この話を聞いてきた。また沈裕自身も話していた。

【解説】前田家本は戴胄を「戴素胄」とするが、その箇所は高山寺本では「戴胄素」、知恩院本では「素戴胄」となっている。「素」は「もとより」の意で、前田家本が「戴素胄」としているのは誤写。戴胄は貞観三年（629）に民部尚書となり、その後吏部尚書となったが免ぜられて、民部尚書参豫朝政となっていた。唐臨の兄唐皎は、貞観中に吏部侍郎となり、後に益州長吏となって卒した（『旧唐書』八五・『新唐書』一〇三）。

6 唐・釋道英 貞観十年

【概要】若い時から禅の修行をしていた河東の沙門道英は、冬の末に黄

引に譲渡させられた。しかし、法端が見ようとすると経は文字の書かれていない黄紙に変じており、恥じ恐れた法端は経を返却し、尼が悲しみながらも経を捧げて行道すること七日七夜に及ぶと、経の文字が元に戻っていた。

貞観二年（628）、法端自ら唐臨に語った。ただし唐臨はその尼の名は忘れてしまった。

【解説】『法苑珠林』巻二七は、この尼の名を「法信」とする。『冥報記』には、本話のような河東関連の話が多く見られるが、これは李建成の部下であった唐臨が、玄武門の変の後、中央から排斥され、河東万泉県の丞となったためである。

5 唐・釋道懸 貞観二年

【概要】蒲州（現在の山西省永済市のあたり）、仁寿寺の僧道懸は、涅槃經の講經に長けていた。貞観二年（628）、崔義真が虞郷の県令となった時、人々に依頼されて講經を行つた道懸は『涅槃經』を「師子吼菩薩品第十一」まで講じて、突然卒した。崔義真が自ら道懸を終南山に野辺送りところ、十一月であつたのに遺体の周囲に花が咲き、七日後にしほんだ。

これは、崔義真や現地の人々の皆話していることである。

【解説】仁寿寺は『統高僧伝』巻十四にも見える。今の山西省洪洞県の南にあった。本話も河東関連話である。

51 唐・竇軌 貞観二年

【概要】殺戮を好んだ洛州都督竇軌は、益州行台僕射として多数の将士や行台尚書韋雲起を殺害した。貞観二年（628）冬、洛陽で病氣にな

り、何人もの生首が自分を責め立てるのを見て死んだ。

【解説】竇軌は、武徳九年（626）、玄武門の変が起きると、仲の悪かった行台尚書韋雲を李建成の一味として処刑した。竇軌は貞観四年（630）に死んだ。

42 唐・殷安仁 貞観三年

【概要】京兆の金持ち殷安仁は慈門寺の僧を供養していた。義寧（617～618）の初め、客が他所で盗んだ驢馬の皮を殷安仁に送った。貞観三年（629）になって、驢馬の殺害で冥府の召喚を受けた殷安仁は慈門寺の坐仏堂に逃げ込み、手の出せない冥吏に、驢馬を殺したのは自分でないこと、さらに驢馬のために追福をすることを述べて驢馬と交渉してもらい、罪を免れ、驢馬のために追福を行つた。

盧文厲が唐臨にこの事を話した際に、殷安仁は今も健在であることを述べた。

【解説】義寧（617～618）は唐王李淵の傀儡であつた隋の恭帝の元号。李淵に皇位を禅譲し義寧二年（618）は武徳元年となった。慈門寺は京城の五寺の一。盧文厲は監察御史で、河東から中央に復帰した唐臨の侍御史時代の同僚であつたと考えられる。

16 唐・張亮 貞観五年頃

【概要】幽州の都督張亮は仏教を信じており、智泉寺の我が身と同じ大きさの仏像を特別に供養していた。ある時、張亮がその仏を供養している際に、寺に落雷があり、柱が壊れて、撥ねた柱の欠片が張亮の額を直撃したが、張亮は痛みも感じず、怪我もしなかった。ただ、額に赤い痕があつた。仏像を見ると、仏の額に大きな痕が出来ていた。

くしている。

岑文本はこの妾に会って本人から聞いた。唐臨も使者として江上に赴いた際に船頭から聞いた。

【解説】岑文本は、頻出する話者の一人である。蘇長は蘇世長のことで、蘇長と呼ぶのは唐の太祖李世民的世の字を避けたのであろう。京兆、武功の人。隋の大業中、都水少監となる。唐の高祖より諫議大夫を拝し、奢侈を戒めるなどの諫言をした。巴州刺史となり船が転覆して溺死したことも史書に見える（『旧唐書』七五・『新唐書』一〇三）。巴州は現在の四川省重慶地方。嘉陵江は四川省を流れる大河である。

23唐・鄭師弁 武徳中か？

【概要】東宮右監門兵曹參軍鄭師弁は未だ弱冠にもならぬ頃急病で死に、冥府に連行されたが、知り合いの僧に助けられ、五戒を授けられて蘇生することが許された。しかし、数年後、友人に勧められて猪の肉を食うと翌朝には口に血が溜まっており、また数年して結婚し、妻の実家で肉を食わされると、鼻に癒えることのない瘡が出来た。

唐臨は、昔、鄭師弁と東宮に宿直した際に、本人からこの話を聞いた。

【説明】鄭師弁の名は前田家本では「邵師弁」となっているが、『太平広記』所引「法苑珠林」に拠り「鄭師弁」に改めた。鄭師弁または邵師弁は伝未詳であるが、唐臨は武徳年間に太子李建成に仕え、左衛率府鎧曹參軍となっている。東宮右監門兵曹參軍である鄭師弁とともに東宮に宿直したとすれば、おそらくはこの時期であり、本話は武徳期の説話に分類した。

II 貞観年間（627～649）

武徳九年（626）、李世民は玄武門の変において皇太子である兄李建成为討ち、高祖を退位させ、唐朝二代皇帝太宗として即位し、翌年（627）、貞観と改元した。貞観は二十三年続き、太宗の崩御まで改元されることはなかった。

唐臨にとっては二十代の終わりから五十歳ごろまでの時期となる。

55唐・柳智感 貞観初

【概要】貞観の初め、長拳県（現在の浙江省長拳県）の令であった河東の柳智感は、冥府に召喚され、冥官に任じられそうになったが、親が老いていることなどを理由に死を免れ、生きたまま、昼は現世の県令、夜は冥府の判官を勤める事となった。冥簿を見ることが出来るようになった柳智感は知人たちに先々のことを知らせ、善行を積ませて、死後の罰を免れさせた。やがて正規の冥官が着任することになり、柳智感は解任されたが、現世の仕事で囚人を逃亡させるという失敗を犯した際に、冥官だった時の下吏の助力で、逃亡した囚人を捕まえることが出来た。

この話は柳智感から直接話を聞いた光録卿柳亨が唐臨に語った。御史の裴同節ら数人の説くところも同じであった。

【解説】柳智感が「河東の柳智感」と呼称されるのは、柳智感が柳宗元らと同じく、河東（山西省）を本籍地とする名族柳氏に連なる人物であるためである。

4唐・練行尼 貞観二年

【概要】河東の法花経読誦の修行をしていた尼は、能書の人に精進潔斎させて八年かけて書写させた法華経を持っていたが、竜門の僧法端に強

韋孝諧が唐臨に語った。

【解説】「14唐・韋仲珪」と同じく話者は韋孝諧である。この話の中の韋という者はおそらくは韋孝諧の従兄弟であろう、と唐臨は注記している。

19唐・李大安 武徳中

【概要】武徳中、工部尚書李大亮が越州の総管であった時、兄の隴西の李大安は京師から大亮に会いに行った帰り、大亮の奴婢の一人に項を刺されて死んだ。冥界に行った大安は肉の塊に「我が肉を返せ」と迫られたが金の仏像に救われ、傷も治してもらい、蘇生した。金の仏像は大安の妻が旅の安全を祈って造らせたものであったことが、背中の朱点の一致から分かった。

李大安の妻は朗州刺史夏侯洵の妹であり、唐臨はこの話を夏侯洵から聞いた。また、李大安の兄の子である李道裕からも、道裕が大理卿であったときに聞いた

【解説】前田家本に李大高とあるのは李大亮の誤り。李大亮は隋の開皇六年（586）に生まれ、唐の貞観十八年（644）に卒した。もとは隋将龐玉の配下であったが、李密の捕虜となった後、李淵の元に身を投じて活躍し、唐朝初期の功臣となった。越州は現在の浙江省紹興市を中心とする地域であり、武徳中、李大亮は越州都督であった時期がある。

29唐・李山龍 武徳中

【概要】武徳年間、急病で死んだ右監門校尉の李山龍は冥府の王にその善行について尋ねられ、日々法華経を読誦していることを答えると、高座に登って法華経を唱えるように言われた。山龍が法華経を唱え始めると、数千人の囚人がたちまち罪を免れ冥府からいなくなった。山龍もそ

の功德で現世に帰れることになり、地獄を見て回り、また冥府の役人に拘引されないように書類に諸々の役所の署名をしてもらい、さらに山龍を冥府に連れてきた棒の主、縄の主、袋の主の三人にねだられ、物を送ることを約して蘇生した。その後、水辺に三鬼へ送る酒と肉を供えたと、三鬼が現れて礼を言った。

李山龍はこの体験を帰依している僧に話し、その僧が唐臨に語った。

【解説】冥界訪問譚の中でも、事務手続きの煩瑣や賄賂の要求など、現実世界に準えた描写が目立つ説話である。

44唐・潘果 武徳中

【概要】武徳年間、都水監の小吏であった少年潘果は、飼い主に見つからないように舌を抜いて羊を盗み、殺した食べたところ、自分の舌が徐々に縮み、一年後には無くなってしまった。潘果の辞職願を受け取った富平県尉の鄭餘慶が潘果に事実を告白させ、県の役人は潘果に羊の為に追善供養を行わせた。潘果が五戒を受けて大いに追善供養を行ったところ、一年後には舌が生え、少しずつ元に戻ってゆき、潘果は県に行き、里正に任じられた。

鄭餘慶は貞観十八年（644）に監察御史となり、唐臨にこの話をした。

【解説】食用動物への供養の意識が見られる説話である。

20b唐・蘇長 武徳中

【概要】武徳中、都水使者蘇長が巴州の刺史となり、家族とともに任地に向かう途中、嘉陵江で船が沈み、男女六十余人が一時に溺死したが、常に法花経を読んでいた妾だけが岸に着き、持っていた経函を開くと、経は濡れていなかった。女は嫁いで今は揚州におり、いよいよ信心を深

【解説】岑文本（595～645）は官は中書令に至り、江陵県子に封ぜられた（『旧唐書』七〇・『唐書』一〇二）。『冥報記』の重要な説話提供者の一人である。本話は天下大乱のすこし前の話であるので大業（605～618）の頃の出来事と考えられる。「25隋・睦仁蒨」の末尾に、文本は父が死んで、邯鄲から郷里の江陵に帰った旨が記載されている。水難は、この帰省の時に遭遇したのではないかと考えられる。江陵で斎会を設けたというのが、父親の供養の為であったと推測されるからである。

二 唐朝期の説話

I 武徳年間（618～626）

武徳は、唐の高祖李淵の治世に行われた唐朝最初の年号である。隋の義寧二年（618）五月、唐王李淵は、自らの傀儡としていた恭帝の禅譲を受けて唐の高祖として即位し、武徳と改元した。以後、高祖の退位まで改元されることはなかった。

隋の開皇二〇年（600）頃に生まれたと考えられる唐臨にとっては、武徳は弱冠頃から二十代半ば過ぎまでの時期であり、皇太子李建成に仕えていた時期でもある。

49 唐・孔恪 武徳初

【概要】武徳の初め、遂州総官府の記室參軍であった孔恪は、冥府に連行され、牛や鴨を殺し、鶏卵を食べた罪を問われ、数年前に死んだ弟も証人として召喚された。孔恪は牛や鴨を殺したことは公務のため、鶏卵は幼い時に母が食べさせたもの、と言い訳をしたが、聞き入れられず、

有罪の判決を受けた。しかし、善行もあったという主張が認められ、七日間の猶予が与えられ、蘇生した孔恪は僧尼を集めて行道懺悔し、七日目に家人に別れを告げて命終した。

唐臨の兄が遂州総官府に所属していたことがあり、この話を詳しく知っていた。

【解説】遂州は現在の四川省遂寧市。唐臨の兄、皎は武徳の初めは秦王府記室として秦王であった李世民に仕え、李世民の征討軍の檄文作成を担当していた（『新唐書』卷一二二）。

14 唐・韋仲珪 武徳中

【概要】臨邛の孝子、韋仲珪は、武徳年間に父が病死し、墓石の傍らに庵を結び、法華經を誦すること数年に及び、虎が經を聴きに來る、墓の周囲に茎が赤く蓋は紫の芝草が生える等の奇瑞があり、表彰された。

【解説】臨邛は現在の四川省邛崃市である。高山寺本・知恩院本では前話の「13隋・蕭璟」の末尾に韋仲珪の弟で大理主簿の韋孝諧がこの話を語ったとする注記があるが、本来は本話の注記であったと考えられる。そして高山寺本・知恩院本において本話の末尾に置かれている、唐臨が使者として江南に行った際に揚州の鍼医飄陀からこの話を聞いたとする注⁴は、前田家本では、次の「15隋・孫宝」の末尾に置かれており、本話の注ではないと考えられる。

48 唐・臨邛人韋 武徳中

【概要】臨邛の韋という者は、誓い合った女がいたが、年を経て愛情が薄れ、女が怒り恨むと厄介事を恐れて女を縊り殺し、数日後に体が痒くなり、癩を發病して死んだ。

『冥報記』クロニクル―唐朝編―

The Chronicle of Mingbaoji — Tang Dynasty —

『冥報記』年代録 ―唐朝部―

三 田 明 弘
MITTA Akihiro

【要旨】唐朝初期成立之佛教志怪小说『冥報記』の重要特点是时代性。『冥報記』編纂者唐臨非常重视故事的纪实性。『冥報記』收載之故事的大部分是唐臨の亲戚朋友们亲眼看到的，或者从当事者直接听到，甚至自己体验的「真实」故事。在这次研究中，论者按照时代前后将『冥報記』收載之全部故事重新排列，要复现作为一部历史书的『冥報記』的真面目。『冥報記』不仅是一部释家辅教之书，又是一部介绍从佛教之角度看的贞观盛世的历史书。

本论文登載整个研究的后半部分・唐朝部分。

はじめに

本稿は、中国を代表する仏教説話集『冥報記』が作者である唐臨自身や周囲の人々が実際に見聞した出来事を記すという「同時代性」を大きな特徴としている点に着目し、『冥報記』全五十七話を年代順に再排列することを試みた結果報告の後半部である。⁽¹⁾

今回扱う唐朝こそが、唐臨が活躍した真の同時代であり、収集される説話の内容や、説話を提供する話者たちを通して、貞観という「聖代」

を中心とする時代特有の特徴や雰囲気のみならず、唐臨自身の人生も透かし見ることができるのである。

一 隋朝末期の説話

21 唐・岑文本 大業頃か？⁽²⁾

【概要】中書令岑文本は年少の頃より仏法を信じ、常に『法華経』普門品（一般には『観音経』として知られている）を念誦していた。かつて呉江で乗船中に船が損壊し、乗っていた人は皆死亡したが、文本だけは水中で「仏を念じよ。そうすれば助かる」という声を三度聞き、波に乗って北岸に打ち上げられた。その後、江陵で齋会を設けた際に、客僧の一人より「天下まさに乱れんとするが、君は幸いにしてその災いに与らず、ついには太平に逢い、富貴を致すなり」と予言された。そして文本の食事をする碗の中に、舍利が二粒入っていた。

岑文本自身が唐臨に語った話である。